
奏狂濁禪

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奏狂濁禪

【Nコード】

N1822L

【作者名】

Sorairo 光

【あらすじ】

霊感が強い人々のお話と不思議な体験をした人のお話。

霊（前書き）

信じるも信じないも自由です。

どうぞ、好きなように解釈してください。

一応書いておくと、これは実話です。

作者個人としてはこの話・・・信じない、で・・・仮想現実だと思っていたほうが幸せだと思います。（グロテスク有り、血有り、乗っ取り有りの気持ち悪い世界が嫌いな人は今すぐここを閉じて、このこと永遠のサヨナラをしましょう。

それでも作者の友達であるR君（その他にもいます。）の実話を小説ネタにしようと思ったのは、作者はこのような体験は幸せでありながら寂しい事でもあります、出来ません。

ですから、ホラー大丈夫☆&結構好きな作者としては新鮮そのものだったのです。

笑うのも結構、呆れるのも結構、信じないも結構。

すべて読者の皆様にお任せいたします。

ですが、この小説を荒らす事と、このような力を持った人たちを馬鹿にしたり、茶化したりすることだけはおやめください。

もう一度書きます。

作者の身の回りにいる友達の実話です。

ですが、読者の皆様は信じないと思い込んで読んでいただくほうが幸せだと思います。

本来、このような世界は視えない作者のような住人は知る必要もないのです。

それでも作者のような恐いもの見たさ&どっかの根っからのホラーマニアなどの方はおすすみください。（そんな人、本当にいるのかは作者にはわかりません。少なくとも作者は見たことがありますん。

内容は恐怖シリーズのフィクションにありきたりなものとなっております

りますが、彼ら、彼女らにとって“それ”が日常なのです。
上にあった馬鹿にしない、茶化さない、荒らさない、を守る方は
どうぞおすすみください。

霊

ながたき
長滝 レイヤ

成績それなりに優秀。

背は170・・・を今はこえたであろうところ。

外見は典型的な草食系男子。

現実部活は文化部。

以前は運動部であったが、故障し、運動部を止めた。

性格は優しくおっとりしていて、無理矢理押し切る事はしない。

時と場合によりけり変わってくるが・・・基本はヘタレ。

メガネに黒い髪、ワックスはつけない。

漫画の中に出てきそうな人物。

優しいところが案外女子に人気だが、普段はヘタレなため、人気があると本人は知らない。

彼こそ・・・そう、視えすぎて困り果てている人物の一人目である。

「ゲッ・・・!!」

最近は・・・そーゆーモノが俺には見える。

「おー? レイヤ、どうしたんだよ?」

友達もそーゆーモノが視えるが俺ほどではないらしく、目の前に広がるモノに気付いていない。

「な、ちょっと向こうの道から帰ろうぜ。」

「はぁ? 何だよ!」

「いいからさ。な?」

俺が今、背中を押している人物は俺の親友であるシンである。

気付いていない親友は置いておいて、俺は早くソコからおさらばしたかった。

遠回りをすると、シンは辺りをキョロキョロ見渡して一言。

「なんだよ、綺麗なねーさんでもいるのかと思ったたらなんもいねーじゃん。」

もちろんこれは冗談だ。

シンは女つたらしではない。

第一、彼女がいる。

「いるわけねーだろ。彼女に怒られるぞー？」

苦笑したら、シンも笑った。

少しだけ自分の女っ気なさにがっかりする。

女友達なら、まあ、いなくもないが、彼女は高校に入ってしばらくたった今でさえ2度程しか経験がなく、現実には彼女がいない。

しかも女友達には“ヘタレ”と言われる始末……。

「おいっ！ため息ついてないでなんでこっち来たんだよ！？マジで！」

どうやら気付かないうちにため息がもれていたらしい、無意識って怖い……じゃなくて。

「ああ、ちよっとアレだよ……霊魂の固まりみたいなのがすぐ前にあってさ……。」

「そんなんで遠回りさせんなよ！」

「おまつ、そんなんってっ！どんだけ危険か知らねえから言えるんだろ！？」

「お前は視え過ぎなの、そんなんいちいち避けてたら俺、家に帰れなくなっちまうよ。」

「……んなこと言われたって……俺だって視たくて現在にいたるわけじゃねーよっ！」

「お、じゃあ俺こっちだからじゃあな〜！」

「おう、また明日！」

無事家に帰宅した。

そしてため息……。

あっちこっちから視線を感じる……。

「ただいまキスケ。」

俺は鳥かごを除いたがキスケはこちらに背を向けたままだ。

「かわいくねーやつ．．．．．」

あ、キスケというのはうちで買っているインコの事だ。

ペットショップのオヤジは言葉を喋るとか20年以上生きるとか散々ホラをふきやがって．．．．．全然言葉しゃべんねーし、気はつええし、おまけに20年もインコは生きないらしい。

キスケと言う名前だがキスケはメス。

どうやら雌はしゃべらないらしい。

20年も生きないことも友達から聞いた俺って一体．．．．．

カバンを置いて、着替え始めた。

どうやら帰ってくるのがわりと遅かったらしい。

もう結構な時間だ．．．．．風呂にでも入ろう。

とりあえず風呂場に行つてのんびりしようと風呂に入ると、窓から視線を感じた俺は固まった。

見るな．．．．．見るなよ？俺．．．．．

次に上から視線を感じた。

お湯につかっているのに寒気を感じ、鳥肌が立ったのであわてて風呂からあがり、バスタオルで体を拭こうとしたその時だ。

洗面台の鏡に、何かが映っていた．．．．．

うん、何が映っていたかは聞かないほうがいいと思う。

部屋に戻っても結界内に入ろうとしてくる幽霊達がかなりうざい．．．．．ケータイもそーゆーお祓いの画面とか画像とかあるのにそれを擦り抜けて“表示不可能”とかいう電話がくる。

うん、よい子の皆、“表示不可能”は絶対出ちゃダメだからな！？体、乗っ取られるからな！？↑すでに俺は面白半分に出て、乗っ取られかけたところを母親に助けられて涙目状態だったという、情けない過去がある。

しかも電話が切ろうとしても切れない！

すごい耳鳴りだし、指先から感覚なくなるし．．．．．エトセトラ．．．．．

ま、そんなこんなで俺は女友達とメールのやりとりをしていた。彼女もまた、不思議な経験をいろいろしたようだ。

うらやましい事に今は何も起こらないらしいが……………。

そのメールの話題でふと貞子について触れた。

貞子？貞子より貞子の後ろにいるあちらさんのほうがよっぽど怖いに決まっている！

そう、俺には他の人には見えない共演者さんが沢山見える……………
・のでホラー映画はあまり見ない……………上に映画館もあまり
いらない。

映画館とかカラオケボックスとか最低だ！

やつら、暗いから集まってくるんだよ！

特に怨念みたいな映画は恐ろしい。

電子レンジに顔があったり、隙間に男の顔とか、リアルに共演者に憑いてる霊とか……………。

ああ、思い出すだけで身の毛がよだつ……………。

そうそう、隣にいた友達を驚かせたこともあったな。

とある共演者さんにくつついてた霊がいきなりこっちを見たわけだ。俺はこっちみんなよ……………みたいに思っていたわけだが、そいつが俺に近づいてくるんで思わず声をあげた。

「うおっ!？」

で、一人だけめっちゃ浮いたってわけだ……………。
全く、こんな力持つべきじゃない。

昔はこんなに見えなかったのに……………。

数日後、俺はリアルに驚く体験をすることになる。

とあるゴーストストリート（俺が勝手に名付けた。）を友達とチャリを押しながら歩いていたらいきなりケータイにメールを受信。

うん、みんなならだいたい予想できるよね？

その通りだよ……………。

———
メール一件受信

メール一件受信

アドレス――

件名――

つゝかまゝえた♪

――

赤字でそれだけきて、すごい悪寒がした。

この時の悪寒は今でも忘れない。

俺は友達のチャリも友達も無理やり引っ張ってなんとかコンビニに逃げ込んだ。

友達は放心状態だったので頬を思いつきりビンタしたら帰ってきた。

「あれ・・・・・・・・俺・・・・・・・・。」

その時、きれいに口を丸く開いている店員さんがちらりと目に入っ
た。

その時だ。

――

メール一件受信

アドレス――

件名――

本文

逃がさない逃がさない逃がさない逃がさない逃がさない
逃がさない逃がさない逃がさない逃がさない逃がさない
逃がさない・・・・・・・・

――

ひたすらに赤字でびっしりと書いてあった。

俺と友達は冷や汗状態。

というか友達はかなりきよどっていた。

うん、いくら霊には慣れてるとはいえ、相当怖いよ？

うん・・・・・・・・マジで逃がしてくださいって感じだった・・・・・・・・

恐怖で震える友達とこちらをチラチラ見ている店員さんを尻目にコ

俺はただただ苦笑した。

それしか出来なかった。

「もうマジ勘弁して！お前嫌い！」

嫌われた………といっても今だに仲良しだが。

んで俺は何をしたかというと前を向いたわけだ………。

怖くなかったわけじゃない。

自分が乗っ取られる危険もないわけじゃない。

だけどこのままでは埒が開かないと思ったんだ。

男はニタリと笑った。

俺もニツコリと笑い返した。

そして口パクで“失せろ”と伝えると男はぶちギレをした。

俺も少々本気でキレたのできたメールにお祓い画像を大量に張りつけて送り返したところ、男は消えた。

今になれば何故送りかえせたのかも謎だが、お祓いをしたわけではないのでまたいつか仕返しにくるのではないかと俺は思っている。

「もう寄んなお前！」

友達ほぼパニックっていた。

「ああ、そう。じゃあお前一人で帰れ。」

俺が突き放したところ、友達は相当焦ったらしくすがり着いてきた。

「ああ、嘘嘘、嘘だからあー！」

正直、あれはおかしかった。

寝るとき毎晩窓を幽霊に叩かれるのは正直うるさくて辛いが、最近
は慣れてきたところだ。

そして俺は今日もあちらさんと出会う………。

ゴーストストリートで幽霊に追っ掛けられ、テレビのチャンネルを
カチカチかえていたら変な画面に飛び、紫色の画面に貞子みたいな
のが歯をむき出しにして笑っていたり、お爺ちゃんの家でいきなり
電気が落ちてきたり、テレビを見たら日本人形がでてきたり、外に
出ようとドアを蹴り飛ばしたら離れにあったはずの日本人形がたっ
てて、それを壊し、お爺ちゃんに怒られたりと………まあ、

いろいろ・・・。
何故俺には無害な幽霊が見えないんだろぅなあ・・・。

霊（後書き）

タイトルの奏狂濁禅というのは

■奏…奏でる

■狂…狂う

■濁…濁悪 末世に起こる現象である五濁と、人間の悪行である十悪と。人心が汚れ、罪悪が満ちていること。e t c . . .

■禅…精神を一つの対象に集中し、その真の姿を知ろうとすること。当て字ですがそんな意味です。

読み方は奏狂濁禅そうきやうだくぜんです。

ちなみに本文に出てきたブラメというのは嫌いな人に送るイジメメールだそうです。

レイヤ（仮名）君は私のお友達なので事実を元にはしていますが実際にまったく同じことが起こったかはわかりません。（特に会話の部分）

この小説は事実を（80%くらい）元にしたフィクションです。

■霊…（ゼロ）

式

ホラーならよくありきたりな動く人形、一人でに動く物体って、ありきたりだよな？

でももしそれが本当に起きたらどうする？

あたし、鈴木^{すすき} ユリナは小さい頃からそーゆーものが視えた。

多分父型の遺伝で・・・・・・・・、母型は見えないらしい。

あたしの外見はスポーツマン？

肌は健康的な少しだけ小麦色。

黒髪の短髪でテニス部所属。

身長はちっちゃいな・・・・・・・・たぶん155くらい。

性格は強気、たまに女王って言われるかも・・・・・・・・支配的な意味で・・・・・・・・。

あたしは小さい頃に自分が人とは少し違う事を知ったんだ。

何があったかと言うと、小さい頃に描いた絵が壁に飾ってあったんだけど、どうしてかあたしはそれがすごく気に入らなくてその絵の左目にペンを突き刺しちゃって、夜中トイレに起きたら、その絵が左目から血を流しながらあたしに「どうしてこんなことするの？」って聞いてきたの。

怖くて逃げ出したけどね。

あと、赤ちゃん用の赤ちゃん人形、たまたま二つ揃っちゃって、それがしばらく和室に置いておいたら二つして時計みたいに目をギョロギョロ動かしてたりとかして・・・・・・・・いきなり顔の横に垂直にシャーペンが振ってきたりとかね・・・・・・・・。

足長伯父さんみたいなのが家に入ってきたり・・・・・・・・いろいろあるんだけど、今でも覚えているのは、リカちゃん人形・・・・・・・・かなあ・・・・・・・・。

これはあたしが小3くらいの時の話。

6体か7体いるうちの一体だけがいつも悪者役だった。

悪者だったから服も着せなくて、髪の毛もとかさなくて、他のリカちゃん人形達に蹴られたり殴られたりのアクションシーンをよくやっていた。

でもいつしかあたしは人形で遊ばなくなって、ある日悪役のリカちゃん人形が夢に出てきたんだよね。

「どうしてあたしだけ虐めるの？許さない．．．．許さない．．．．許さない！」

そのリカちゃん人形の怖さにあたしは飛び起きたけど、何故か目を覚ました目の前に悪役の裸のリカちゃん人形がいたの。
だからあたしは一生懸命誤った。

「ごめんね．．．．ごめんね。」

ちゃんと髪の毛もきれいにとかして、服も着せてあげた。
それなのにリカちゃん人形がしまって置いたはずなのに目の前に落ちてくる日々は絶えない．．．．。

だからあたしはそのリカちゃん人形と一緒に風呂に入った。

リカちゃん人形はおけに入れて、体を綺麗に洗ってあげた。

そして風呂からあがろうとしたその瞬間にあたしはいきなり足を何ものかに引っ張られた。

苦しい、何が起きてるの？

わからない．．．．おかしい。

お風呂場がこんなに深い分けない。

なのにもがいてももがいても下に引きずり込まれそうになる。

あたしは必死でそのつかんでいる何かを蹴って水面に上がった。

そして風呂からあがると、水面を見た。

変わらずに桶には水が張られている。

なのに．．．．桶にリカちゃん人形の姿はない。

リカちゃん人形は風呂釜の水面に浮かんでいた。

恐かった．．．．．気味が悪かった。

「．．．．．どうして？．．．．．どうして！？ちゃんと丁寧に扱ってあげたじゃん！体も綺麗にしてあげたじゃん！なのにどう

してこんなことするの!？」

すると唐突に脳に言葉が響いた。

『ウフフ……許さない……許さない、許さない!』

あたしはお風呂からあがり、リカちゃん人形を別室に閉じ込めた。

それから言うもの、別室からコトコトと物音がする以外特に何もなかった。

そして半年が過ぎようとしたある日、いきなり机に置いてあった犬の人形が動きだした。

明らかに犬のお腹あたりから足が生えている。

あたしは犬を掴み、足をつかむとそれを抜き取った。

それは、悪役のリカちゃん人形だった……。

犬のぬいぐるみはなが空洞になっている。そこにリカちゃん人形が体を曲げて入っていたのだ。

「またあなたなの? どうやって抜け出してきたの! ? あの倉庫から!」

「ウフフ……。」

さすがに気味悪さが限界まできたあたしは人形を壁に叩きつけるとその人形を頑丈にきつめに封印した。

そしてしばらくたったある日、あたしは夢の中で一人、暗やみのなかに立っていた。

「ここは……どこなんだろう?」

すると目の前に下っていく階段が現れ、上から「逃げて、そこから逃げて、早くっ!」という声が聞こえた。

それは悪役以外のリカちゃん人形達の声だった。

「ここはどこなの?」

あたしが階段を上ろうとすると、手を捕まれた。

そこにいたのは悪役のリカちゃん人形。

「ねえ、ここはどこなの?」

「逃げて、早く!」

「逃がさない……あなたはこれからあたしと地獄へ行くの。」

「階段を下りながらいうリカちゃん人形にあたしは手を勢い良く振り払った。」

「地獄？冗談じゃない！」

あたしは上の光にむかつて走りだした。

「逃がさないって、言ってるでしょ！」

あたしは追い掛けてきたリカちゃん人形を蹴とばし、ひたすら上へと走り続けた。

それでも今度は巨大な手が迫ってきた。

「許さない、あなたは罪を犯したのよ、だからあたしと一緒に地獄へ行くの！」

走って階段の途中で何故かはさみが落ちていたのでそのはさみでリカちゃん人形の中指を切った。

その指からは赤黒い血がしたたり落ちた。

すると手は追い掛けてこなくなったので、あたしはひたすら上へと走った。

「よかった………本当によかった………。」

たくさんの自分と等身大のリカちゃん人形に囲まれて、あたしはそこで目を覚ました。

久々に悪役のリカちゃん人形を見ると何故か右手の中指の先だけが黒くなっていた。

ずっと封印してて………偶然中指だけを汚した………？

そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。

とにかく今はお寺で焼き払われてなき人形だから、確かめようもないんだ。

そしてあたしは今日も変なものを見ては素通りする………。

弌(後書き)

■弌…(いち)

式

うち、北原きたはら アキ。

そういったものが代々視える家系。

だけど母親は視えないらしくて昔から何言っても信じてくれない。

外見は茶髪で元氣な結構やせ形。

服はダボダボ系が好き。

背は、標準じゃない？160あるかないか。

氣は強い……って彼氏に言われたわ……。

部活は運動部。

そうそう、部活帰りとかよく見るんだよね。

こつちをジトーっと見てる女の子とか、自分が自殺する残像を残す奴とか。

小さい頃は、

「ねえ、あそこに立ってる人は何してるの？」

なのにお母さんってばキョトンとしちゃって……。

「え？いないわよ？」

「ああ、おまえには見えるんだね。」って……コレがうちの数少ないお父さんの思い出。

うちのお父さんはずいぶん前に死んじゃったんだ。

その時、夜胸騒ぎがしてた。

寝れない、寝れないと何度もお婆ちゃんに言ったけどお婆ちゃんは寝ろとしか言わなかった。

ただひたすらに寝ろと……きっと父方のお婆ちゃんもわかってたんだと思う。

だからうちの意識をそこから遠ざけるために寝ろって言い続けたんだと思う。

翌朝皆して泣いてた。

内容は知ってた。

「お父さんは死んだ。」

事故だったと思う。

夢の中でうちはお父さんとお別れをした。

お父さんは言った。

「お前に負担を増やすことになるかもしれない。ごめんな。」

もちろんうちにはよくわからない。

「絶対幽霊とか信じない母さんだから、お前が視えたとか言ったら辛く当たるかもしれないけど、母さんはきっとボロボロになっちゃうからお前が支えてやってくれ。」

内容をやっとうちは理解しはじめた。

夢にくる前から本当はわかってた。

お父さんは、もう帰ってこないと。

「ごめんな、お父さん逝かなきゃいけないんだ。バイバイ。」

「バイバイ。」

最後にそれだけかわして父と別れを告げた。

母親はあきらかにうろたえていて、泣いていた。

きつと“知ってた。”と言ったら責めまくられるのだろうと幼いながらに悟った。

だからお父さんはお母さんを頼むと言ったのだ。

こんなふうにボロボロになることを予想して。

うちはキュッと口を接ぐんでただ立っていた。

そして現在、うちは悪夢にうなされている。

夢の中でうちの前に蹲っている女の人がいた。

「どうしたんですか？」

とうちが声をかけたのがいけなかったのだ。

うちの後をついてきて、まいばん「死ねっ！」と言われる夢を見る。しかも何故かその死ねっ！の部分だけ目が赤くなり、血の涙を流し、着ているワンピース風の服には大量の血が着いている。

「あんた、もうかえんな。ここはあんたの居場所じゃない。」

と強めに言い返したときも、カタカタと震えだし、血の涙を流した。

そして刃物でさされそうになったり、首をしめられたりする夢を見てうちは飛び起きる。

憑かれにくい体質ではあるらしいのだが、夢の中ではそういったことがよく起こる。

だからうちは今日も寝不足だ・・・・・・・・。。

式（後書き）

■ 式…（2）

惨

私は柴田^{しばた} マサノブ。

正直結婚済みの中年おっさんである。

とは言っても実年齢より若く見られる。

軽いかかそういう意味ではなく純粹に若いといわれるのは元気だという意味だと解釈をし、個人的にはすごく嬉しい。

私は幽霊とかそういういったものはよくわからないし、見えないのだが、不思議な体験をした。

あれはそう……私とあと三人の四人で出かける計画をたてたときだった。

全員男でおっさんの集い。

関係は学生時代からの付き合い……とでもいうのか、とりあえずその四人の中の一人が当日に遅れてきた。

私達もまだその時は若く、夏だったので海辺で女の子でも口説こうとしていたのだ。

「おい、ヨシキー遅いぞ！」

「悪い……遅れた。」

そのヨシキと呼ばれた奴を見ると、彼はあきらかに顔色が悪かった。

「おい……おまえ、大丈夫かよ？」

「あ？何がだよ？」

「大丈夫ならいいけどさ……具合悪いなら言えよ。」

「ああ。」

口々に皆がヨシキに声をかけ、俺たちは出発した。

さすが真夏だけあって目的地に着いたときは昼頃で汗だくだった。

とりあえず室内で昼飯にしたかった私達は目の前にあったカレー屋に入った。

中は人が少なく席は全部と言っても良いほど開いていた。

まあ、当然だ。昼にするには少し早い時間だったから。

私たちが席に着くとウェイターさんが水を運んできてくれた。
でもおかしなことに水は3つ。

私たちは四人だった。

水がおかれていないのは、いまだに具合の悪そうなヨシキの前だけだった。

「すみません、もう一つ水をください。」

一人がそういうとウェイターさんは不思議そうな顔をしてもう一つ水を運んできてくれた。

「おいヨシキー、お前相当存在感ねえぞ！」

「……るせー。」

そのときは皆で笑っていた。

“まだ” 笑い話に出来ていた。

四人分頼んだカレーもウェイターさんは不思議そうな顔をしていたのを尻目に、なんで不思議そうな顔をしているのかと私は不思議に思った。

ヨシキは“そこにはまだ” 存在していたからだ。

目的地に着いて私達はチェックインを住ませると個人行動に移った。夕方ごろ皆を見付け、宿に戻ったが、ヨシキだけは誰も見ていなかった。

宿の夕食の時間になっても10時頃になってもヨシキは戻ってこない。

「そのうち戻ってくるよ。今は遊んでるんだろ。」

「俺ら差し置いて一人だけいい思いしてんのかよー！ヨシキずりーぞっ！」

そして10時30がすぎ、11時が過ぎた。

「おい、さすがに遅くないか？」

「1日で彼女作るとは、やるな……ヨシキ！」

「感心するよりもう寝ねえ？明日には帰るんだぜ。俺ら。」

「そうだな。きつと夜に1人で帰ってくるよな。」

そういつてみんな寢床に着いた。

そして深夜。

二階にあった部屋は裸足で誰かが廊下を歩いたり、階段を上り下りしている音が聞こえ始めた。

ひたすらにヒタヒタ、トトトト……という音が聞こえるのだ。

そしてしばらくさ迷った後、私たちの部屋の前でピタリと足音は止み、スツと扉が開いた。

あまりの不気味さに一人以外みんな起きていた。

そこにいたのは……宿屋の女将さんだった。

「夜分遅くに申し訳ありません……もしやおつれ様がお一人、行方不明にはなっておられないでしょうか？」

嫌な予感がした。

「なってます。」

「そうですか……特徴は……。」

女将さんの話した特徴は全てヨシキに当てはまっていた。

私ともう一人は顔を見合わせ同時に言った。

「ヨシキだ！」

「あいつがどうかしたんですか！？あいつに何があったんですか？」

「警察の方がいらしておりますので、詳しいことはそちらで……」

私達はのんきに寝ているもう一人を叩き起こすと警察官に案内され、ある部屋で事情を聞いた。

どうやらこの辺の住人じゃない人が夕方ごろ、海辺でどざえもんとなっていたらしい。

そこで観光客だろうと一軒一軒民宿を尋ね、女将さん達に声掛けをしてもらっていたらしい。

つまり、今ヨシキがいるのは遺体安置所にあるということだ……私達はそこに向かっているということだ。

そこで横たわっていたヨシキの姿に大きな外相はなく、朝と似たような顔色のままだった。

「間違いありません。こいつ、ヨシキです。」

でもおかしなことに体がグネグネしている。

これが一人の人体とするなら、ヨシキの体は人間ではなくなってしまっているのだ。

「すみません、これは何ですか？」

「見ないほうが……」

警察を押し切って私はかけてあった布をすべて外した。

そこには……ヨシキの下半身に逆さまになってしがみついているすごい形相をしたお婆さんががちりと絡み付いていた。

私は……いや、それを見たみんな渡し動揺に固まってしまった。

「この人は……」

擦れる声でやっとそれだけ聞くと、お婆さんの身元は判明しているらしく、話してくれた。

このお婆さんは3ヶ月前くらいにすでに行方不明になっていてつい最近死亡が確定したのに遺体が見つからなかったらしい。

ヨシキの遺体よりも傷みが激しいのはそのせいなのかもしれない。

「……ちよつと待ってくださいよ？俺たちは今日来たばかりなんですよ？なんでそんな……数ヶ月も前に死んでるはずの人がこいつにくつついてるんですか？」

誰かが必死に言った。

私はそこまで頭が回らなかった。

ただ、いっぱいいっぱいだった。

警察の人も頭をひねるばかりで答えはわからない。

結局何も解明されなかった。

私は今も幽霊とかそういう類は全く見えないし、見たいとも思わないが、これはもうずっと残ったまま色褪せることのない記憶である。

惨（後書き）

■惨…さん、むごたらしいさま。また、ひどくいたましいさま。多く「さんとして」の形で用いられるそうです。意味的にはそのまんなま。

死―後書き

小さい頃、あなたも何度か不思議な経験をしませんでしたか？

私はありました。

いきなり電源も入っていない友達の家のパソコンがついて、失われていたはずのデータが復活していたり、公衆電話のカード差し込み口に切符がささっていて、面白半分ですれで親のケータイに電話したら、電話が繋がりはしないもののかけられたり（親は切符を買っていたので出なくて当然なのですが）。・・・・・・親のケータイ履歴に履歴が残ったり。

しばらく経つと、私のケータイに“表示不可能”とかいう謎の電話が来ているにもかかわらずまったくケータイが鳴らなかったり・・・・・・（この小説にも出てきたアキ（仮名）さん、レイヤ（仮名）君にもいまだにきているようです。）

また、“表示不可能”は体質によってまったく内容が異なってくるようです。

私みたいななんだろう？で終わるような軽いものだったり、アキさんのように電話に出ると、ひたすらにプッププッププツといった音が続いたり、レイヤ君のように体に憑依されかけたり。

電話の不思議と言えばそうそう・・・・・・私はよく電話をかけようとして家電の受話器を取ると、無音でしゃべると自分の声がエコーみたいそこから返ってくるなんていう体験を受話器を自ら取った三回に一回はしていました。

今も同じ家電ですが、そんなことはまったくなくなってしまうしただけだね。

それと、真っ黒な格好をした黒ずくめのおばちゃん（乗ってたチャリも黒だったんですよ。）とすれ違うとき、頭を押さえ付けられるような感覚に陥ったり、唐突に軽く首がしめられているような感覚に陥ったりしました。

いきなり目の前で何かが光ったこともありましたが、霊の見える友達に、髪の毛、変な手が撫でてるよって二回ぐらい（それぞれ見える子で1人はユリナ（仮名）ちゃんともう1人は出てきていない女の子です。）言われたり……。

私は感じる事はあっても決して見える子ではなく、視えたとしても良い霊（悪事を働かないタイプ）のしか視えないだろうと言われませんでした。

見えるのにも色んなタイプがあるそうですねー……。本当に。まったく視ることも感じる事もない子達は私の上に書いた話だけでも恐がりですが、私はやはり靈感の強い人、私よりはるかに不思議な体験をしている人の方がすごいと思います。

他にも色々怖い話を聞いた気がするのですが、現在記憶に残っているのは四人の話だけです。

- ・恐怖の悪役だったりかちゃん人間。

- ・恐怖の宛先不明メールと友達の体乗っ取られかけた事件（彼に關してはまだまだ出てきますが今のところ、これが一番怖いです。）

- ・担任教師の友達のかかり怖くて不思議な体験談。

- ・父親との別れとあらたな問題（彼女は現在“新たな問題”のせいで睡眠不足だと嘆いていました。）

話の順番が違いますが、私が話を聞いた順番はこんな感じです。

この話、4で終わらせるのが結構本当に怖くなりそうだったので、本当は5話で終わらせたかったんです。

0入れちゃったんで4なんですけど。

では、みなさんも妙な体験などありませんように。

海に行つて絡み付いたのが海藻ならまだしも、腕や髪の毛だった……なんてしゃれになりませんか？

あと、“表示不可能”の電話、きたとしても取らないほうが良いと思います。

体質によりけり……。なんて書きましたけど、本当に何が起こるか分からないので。

ちなみに後日談です。

生霊に取り付かれてしまったR君、彼に何か手助けでもと思ってしばらくメールをしていましたPCで。

で、こちらは異常ないと送ったら帰ってきたメールがこちら←

——mail——

なら良かった！

ガン見 ジャ が気になる……。

結界 マ も ヲ 健在だし……。

何 ス が狙 ル いナだ……？

青 ノ 目もいな ロウ い……。

なにこれ、嵐の前のゾ 静けさ？

——end——

丸々はつつけちゃいましたが、分かりますよね？

不自然なところだけ読み取ると、ジャマスルナ ノロウゾになってるんです。

でも、それって邪魔しないほうが変ですよね？だって友達なのに助けないほうがありえない。

そしてなぜかこの件だけ私

予言者ちつくになってるんですW青目というのは私が見た瞳の色で、見たのは赤と青だったんですよ。

で、このメールで彼をガン見しているのは真っ黒で瞳孔なしの生霊。赤目をしていた生霊は女性で、後に追い払われましたが、青目男性おそらくはしつこいくらい何度もしベンジにきてます。(現在進行形。)

下手に呪い返しも出来ないとかで相当まいていました……。

黒目(こちらもおそらく男性)は相当強いらしく、こちらともアクセスをとってきました(上のメールがそうです。)

多分今晚も出るんじゃないかな……いつになったら終決するんだろう……。

彼は守護霊が一人やられた！とか言っていました。（守りの巫女さんがやられたらしいです。）

で、死にかけたと……今日もそうかもしれないって考えただけでも恐ろしいですね。

まあ、私は靈感無いので呪いかけられても死なないとは思いますが、あんまりみなさんも余計なことに首を突っ込まないほうがいいかもしれません。

お気をつけくださいね。

死―後書き（後書き）

怖いものばかり選んで書いたので最後は気が抜けるお話にしたかったです。

最後にこれかよ!と思った方、ごめんなさい。

■死：（4）

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1822l/>

奏狂濁禅

2010年10月14日20時08分発行